東京外国語大学『語学研究所論集』第 15 号 (2010.3), 151-160

〈研究ノート〉

イタリア語において動詞 essere が「移動」を表わす場合
—「出来事」と「結果」の関係について —

山本 真司

1. 問題提起 [1]

日本語からイタリア語への翻訳において, 日本語「行く」「来る」はイタリア語では, それぞれ, andare, venire と訳されることが多い. しかし, 必ずしもそのようにならない場合が少なからずあり, そのなかの１つが, 次のように, 日本語では「行く」「来る」など「移動」を表わす表現[2] が使われているところに, イタリア語では, (普通は) 存在を表わす動詞 essere「いる」「ある」(言うまでもなくコピュラ「である」[3] の意味に加えて) が用いられるケースである. [4]

(1) L'anno scorso sono stato a Londra.「私は昨年にロンドンに行った」(Lo Zingarelli)
(L' 定冠詞男性単数形, anno「年」, scorso「過ぎ去った」, sono stato「(私は) いた」[essere の近過去１人称単数男性形], [5] a「に」, Londra「ロンドン」)

---

[1] イタリア語は, 今回の「アスペクト特集」には, 編集委員会の用意した「アンケート」に回答する形で参加する予定であったが, その枠内では収めることのできない多くの問題があることが明らかになった. そのため, 不十分なことは承知ではあるが, そのようにして出てきた問題の１つだけを, 研究ノートの形でまとめることにした次第である.

[2] 本稿の論旨に関する限りでは, 重要なのは, ある場所にとどまって「存在している」のか, あるいはその場所へ「移動する」のか, という区別であり, 「行く」「来る」の区別は副次的なものと思われる. そのため, 「行く」「来る」は, 「到着する」などとともに, 「移動」という範疇にまとめ (イタリア語 andare, venire, arrivare なども同じ), これを「存在」(「いる」「ある」, あるいはイタリア語の essere の代表的な意味) と対比して論じることにする.

[3] コピュラとしての意味は, さしあたり「行く」「来る」の意味の問題には直接関係はないが, 本稿で取り上げる問題全体の展望の中では無関係ではないことは, 後に「なる」の意味を取り上げる際に明らかになるであろう.

[4] もちろん, これはイタリア語固有の現象ではなく, 例えば, 英語の完了形 have been が「行ってきた」「行ったことがある」などの意味で用いられるのはよく知られている通りである. ただ, このような have been とイタリア語の essere が全く並行した振る舞いをするわけでもない. 本稿では詳細を尽くすことはできないが, 一つ意味のある相違点を挙げるとすれば, 英語では have been *to* Tokyo のように前置詞の選択に「移動」の概念が感じ取れるが, イタリア語ではそのようなことはなく, 「東京にいる」も「東京に行く」もいずれも essere *a* Tokyo である.

[5] イタリア語は, 完了アスペクトの過去を表すのに, ２種類の過去時制形「遠過去」「近過去」がある. 後者は, 本来, 英語の現在完了と類似の意味を持つ「avere 「持つ」の現在形 + 過去分詞」(能動態)「essere 「である」の現在形 + 過去分詞」(その他の態) を過去の出来事を表すのに転用したもの. 遠過去・近過去の意味の区別には, 地方差・個人差・文体的な差があり (特に地方差は大きい), 簡潔に説明するのは

問題を提起するにあたって，日伊の訳の問題であるかのような言い方 (日本語の「行く」が andare と，あるいは essere と訳される) をしてしまったが，実は，これが単なる翻訳上の問題 (つまりそのように訳したほうが日本語としては通りがいいという，いわば日本語の側の問題) に過ぎないのか，あるいは，「いる」と「行く」「来る」の違いはイタリア語にとっても重要な意味のあることなのか，少し詳しく考えてみたい，というのが本稿の趣旨である.

2. 辞書の記述より

イタリアでよく使われている伝統的に定評のある辞書のいくつかは，[6] essere に「移動」の意味があるのだと想定している. 例えば，Lo Zingarelli は，「到着する」arrivare,「到達する」pervenire の意味を挙げ，

(2) Fra due ore siamo in città「あと２時間で我々は町に到着する」
(fra「の時間で」, due「２」, ore「時間」[ora の複数形], siamo「(我々は) いる」[essere の直説法現在１人称複数形])

(3) Un attimo e sono da lei「もう少しでそちらに参ります」
(un 定冠詞男性単数形, attimo「一瞬」, sono「(私は) いる」[essere の直説法現在１人称単数形], da「… のもとに」, lei「あなた」)

(4) Ci siamo「着いたよ」あるいは比喩的に「我々は１つの結論にたどり着いた」
(ci「そこに」, siamo「(我々は) いる」[essere の直説法現在１人称複数形])

などの例を，また，andare「行く」の意味とその用例として

(5) L'anno scorso sono stato a Londra「昨年ロンドンへ行ってきた」[(1) に同じ]

を載せている.[7] また，Garzanti のイタリア語大辞典に，やはり「到着する」arrivare,「到達する」giungere の意味で un momento e sono da voi 「もう少ししたらそちらに行きます」(un 不定冠詞男性単数形, momento「一瞬」, sono「(私は) いる」[essere の直説法現在１人称単数形],

---

困難である. 本稿ではできるだけ近過去形で統一した. また，未完了のアスペクトを表わす過去形も当然存在し，「半過去形」と呼ばれる.

[6] これらの辞書は，版・刷を重ねており，かなり頻繁に改訂がなされているものもある (例えば Lo Zingarelli は，近年は，毎年，改訂が行われている) ので，厳密にはそれらの版・刷のあいだの差異を調査することも必要であろう. しかし，ここでは，あくまでも一例として本稿の論旨に関係がありそうな記述をいくつか取り上げるために，さしあたって手元にあった版を参照するにとどめたものである.

[7] 2002 年度版以前には載っていない.

da「… のもとに」, voi「あなたたち」) のような例が載せられているのも同じ趣旨であろう (ただし, こちらは andare の意味・用法は載せていない).

しかし, 「移動」の意味を「存在」の意味と並列して載せておくだけでは問題を解決したことになるとは思われない. 常識的に言っても essere の主な意味は「存在」のほうであり, 「移動」の意味は, それに比べて, 副次的・あるいは二次的であるとの感は否めないであろう. そうすると, 「存在」と「移動」の2つの意味の関係は, 並列ではなくて, 一方から他方を導き出す, というもの, という考えが出て来るのは不思議ではない. そういう意味では, essere に, やはり「到着する」arrivare,「到達する」giungere などの意味を認めて次のような用例を掲げている[8] De Mauro のイタリア語辞典が, これらの意味・用法を estens.「拡大的」と見なしているのは, ごく自然なことと言わねばならない. [9]

(6) Saremo a destinazione fra 4 ore「4 時間で目的地に着くでしょう」
(saremo「(我々は) いるだろう」[essere の未来形 1 人称複数形], destinazione「目的地」, fra「で」, ore「時間」[ora の複数形])

(7) Sarò da te fra 5 minuti「５分で君のところに着きます」
(sarò「(私は) いるだろう」[essere の未来形 1 人称単数], fra「で」, minuti「分」[minuto の複数形])

興味深いのは, 独特の説明と言語的な考察の深さで有名な Devoto - Oli の辞典には, このような「移動」を表わす用法が載せられていないことである. この辞書の性格[10] からして, そのような取り扱いは, 「移動」を表わす essere の用法は, より根本的な意味から派生した, 副次的なものとして理解可能なもの, と解釈されているという意味かも知れない.

どのような経緯で「移動」の意味が「存在」のそれから導き出されるのか, また, そのような意味が可能になるのはどういう条件かであるのか, ということを述べてこそ, 記述は, 説

---

[8] 挙げられている用例は Lo Zingarelli に挙げられているものと大きくは異ならないが, 動詞が未来形になっている点に注目したい. 未来形という時制が選択されていることは, 必須なことではないが, 後述の「推移」の意味をより明示的に表わす効果があるとも言えよう

[9] なお, この意味には同時に, FO「基本的」の印がついている. 従って, 頻度数の点では, かなり高いものであることがわかる. 先ほど副次的・二次的といったが, それはそういう用法上の重要さのことを言っているわけでないことを御理解いただきたい.

[10] この辞書は, 個々の見出し語について, さまざまな意味を文・文脈に「あてはめ」ていくように列挙するというよりも, 語の根本的な意味を見定めた上で, そこからどのように多くの意味が派生していくのかを, 有機的に, そして独特のタッチで, 記述していることで有名である (従ってその記述は示唆に満ちたものとして, 言語の問題に専門的に携わるものなら一度は参照するべきものとされているが, それ以外の専門家や初学者にとって使い易い辞書とは見做されていない感がある).

得力のあるものとなるはずであるが，この「なぜ」にまで踏み込んでいる説明は，筆者の知っている限りでは，普通のイタリア語辞書には見当たらないようである．

3. 結果を表わす完了アスペクト

essere の「移動」の意味を理解する手がかりとして，よく知られている，動作の結果を表わす「完結的な完了アスペクト」 aspetto compiuto[11] の問題から論を始めたい．例えば，イタリア語では，次のような複合時制 (この場合は近過去) のものが，完結的な完了アスペクトの典型例である．

(8) Piero è partito.「Piero は出発した (その結果もうここにはいない)」
(Piero 人名, è partire「(彼は) 出発した」[動詞 partire の近過去３人称単数男性形])

(9) Piero si è svegliato.「Piero は目覚めた (その結果もう眠ってはいない)」
(si è svegliato「(彼は) 目覚めた」[再帰動詞 svegliarsi の近過去３人称単数男性形][12])

さて，このような「結果」を表わす完結的アスペクトの用法を可能にするのは，イタリア語における近過去の文法上の制約に加えて， partire や svegliarsi と対応する言語外現実に関する我々の常識的知識である．つまり，「現在ここにいない」「現在眠っていない」という事態を「移動」や「覚醒」の概念に結びつける我々の理解である．

さて，動詞の表わす出来事とその結果を結びつける論理的関係が緊密であるならば，起こった出来事からその結果を理解することが可能であるのみならず，結果を見てそのような結果に至るまでの経緯を推測することも可能であろう．例えば，次のような２つの文を考えてみよう.[13]

(10) a. Abbiamo aperto la porta.「扉を開けました」
(Abbiamo aperto「(我々は) 開けた」[動詞 aprire の近過去１人称複数形], la 定冠詞女

---

[11] Salvi / Vanelli (2004) の記述によれば，イタリア語では，未完了のアスペクト imperfetto と完了のアスペクト perfettivo が区別される．未完了のアスペクトは，さらに漸進的 progressivo なアスペクト，習慣的 abituale なアスペクト，継続的 continuativo なアスペクトの３つに，完了のアスペクトは，アオリスト的 aoristico なアスペクト，完結的 compiuto なアスペクト の２つに下位区分される．このうち，複合時制の，動詞の結果をあらわす用法に相当するのは，完結的なアスペクトであるとされる．

[12] 用例 (8) (9) は，Salvi / Vanelli (2004) から引用したものだが，これらは，アクツィオンスアルトの説明中に載せられているもので，これを本稿でアスペクトの説明のために流用したのは山本の判断によるものである．

[13] (10) は特に特定の文献からの引用というわけではないが，教育の現場での文法の説明などではよく使われる例である．

性単数形, porta「扉」)

b. La porta è aperta.「扉は開いている」
(è「… である」[動詞 essere の直説法現在３人称単数形], aperta「開いている」[動詞 aprire の過去分詞女性単数形])

「扉は開いています」ということを伝えるために「扉を開けました」ということが可能である (完結的アスペクト) と同時に, 逆に, 「扉を開けましたよ」という意図で「扉が開いていています」ということがあり得る. すると, 後者の場合, 現在の状況が, それに至るまでの経緯を示唆していると言えよう.

すると次のような essere の用例[14] も同じように理解できるのではないか.

(11) Il signor Rossi è già qui. 「ロッシさんはもう来た」
(Il 定冠詞男性単数形, signor「… さん」, Rossi 人名, è「(彼は) いる」[動詞 essere の直説法現在３人称単数形], già「既に」, qui「ここに」)

(12) Il signor Rossi sarà qui fra poco.「ロッシさんはまもなく来るだろう」
(sarà「(彼は) いるだろう」[動詞 essere 未来形３人称単数形], fra poco「まもなく」)

「ここにいる」というのは, (永遠の過去から未来永劫に至るまで同じ場所にとどまっているのでなければ) どこかからここに移動してきた以外にはあり得ないと理解できる. つまり, 現在,「ここにいる」という状況が, それに至るまでの「移動」という経緯を示唆している. ここに含まれている「移動」の概念が, 「来る」の解釈を可能にしていると考えられるのである.

次の用例も, 同じように, 状況を表現することによってそれに至るまでの経緯を表わしている例であると言えるが, それよりもやや込み入っている.

(13) Siamo stati a Parigi il mese scorso.「先月我々はパリに行ってきた」(DISC)
(siamo stati「私たちはいた」[動詞 essere の近過去１人称複数形], a「… に」, Parigi「パリ (地名)」, il 定冠詞男性単数形, mese「月 (暦上の)」, scorso「過ぎ去った」)

この例でもやはり, 「パリにいる」というのは, (永遠の過去から未来永劫に至るまで同じ箇所にとどまっているのでもなければ) どこからパリに移動してきたことを意味し, この「移動」の概念が, 「行く」などの訳を可能にしていると考えられる.

[14] (11)(12) は山本による聞き取り調査より引用.

ただし，それだけではこの文に「行く」の意味が含まれると了解するには不十分である．「行く」と言う概念がここに了解されるためには，①「パリにいる」という出来事が現在に至るまでに一度完結し，なおかつ，② 主語は今は既にパリにいない，という条件を満たさなければならない.[15] ① の条件は，完了アスペクトを表わす時制 (近過去) が選択されていることによって部分的に満たされているが，② は，文を構成する諸概念についての知識というより，発話の時点の状況から了解されることである．

4.「なる」

現在の状況を示すことによってそこに至る経緯を示唆する表現形式の例を，もう１つ見ておこう．それは，essere で「なる」diventare を表わす場合である．

(14) Mi riposerò quando sarò vecchio.「年をとったらゆっくり休もう」(Lo Zingarelli)
(mi riposerò「(私は) 休むだろう」[再帰動詞 riposarsi の先立未来１人称単数] , quando「… するとき」, sarò「(私は) であろう」[動詞 essere 未来１人称単数] , vecchio「年とった」)

essere vecchio 「年をとっている」という状態を示すことによって，その状態に至るまでの経緯，つまり年とった状態への推移「年をとる」を示唆するわけである．

考えてみれば，前項の「移動を表わす用法」も，場所から場所へなのか，あるいは状態から状態へなのか，と言う点は異なるが，「移る」という点では共通している (事実，イタリア語では，移動を表わす動詞は，いくつかの点で，状態の変化を表わす動詞と同じ扱いを受けることが知られている).[16] したがって，この両者が可能であるということは不思議なことではない．

論理的一貫性の観点からは，辞書は，essere に関して「移動」の意味を取り上げるならば，同時に「なる」の意味も取り上げるべきであるはずだが，なぜかその取り扱いは辞書によりさまざまである．Lo Zingarelli のように essere の意味の１つとして「なる」diventare を記載している辞書もあるが，DISC, Garzanti, De Mauro などにはこのような言及はない．なお，Devoto - Oli にこの意味が記載されていないのは，既に説明した，この辞書の性格 (意味を列挙するというよりは根本的な意味に還元して説明する) からすれば不思議ではないであろう．

---

[15] ① の条件が満たされていなければ「今に至るまでずっとパリにいた」ということになるであろうし，また，① が満たされても ② の条件が満たされていなければ，「パリに来た」ということになるであろう．

[16] もっとも顕著な共通点は，状態の変化を表わす動詞も，移動を表わす動詞も，非対格構文を構成することができるということであろう．

5. 選択の可能性

原因と結果を結びつける人間の能力ゆえに，言語は，少なくとも可能性としては，出来事を表現することによってその結果を示唆するという表現形式と，結果を述べることによってそれに至る推移を了解させる表現形式と，両タイプの表現形式を持ち得る．そのため，「ここに到着して現在はここにいる」と言う意味で，È arrivato.「彼は到着した」(動詞 arrivare の直説法近過去を使って) とも È già qui「彼は既にここにいる」(動詞 essere の現在形を使って) とも言えるわけである．しかし，その可能性をどのように実現しているかは，ケースごとに，また，言語ごとに異なっても不思議ではないであろう．

次のような例で，日本語とイタリア語の表現の違いを比べてみよう.[17]

(15) a. Sono stanco. ～「私は疲れた」
b. Ho fame. ～「私はおなかがすいた」
c. Ho raffreddore. ～「私はかぜをひいた」
(sono「(私は) である」[動詞 essere の直説法現在 1 人称単数形], stanco「疲れている」, ho「(私は) 持っている」[動詞 avere の直説法現在 1 人称単数形], fame 「空腹」, raffreddore「風邪」)

各イタリア語文とそれに添えられた日本語文は，よく似ているが，厳密に言うと両者の構造は異なっている．イタリア語は状態を表わしているのに対して，日本語は「ある状態になった」あるいは「ある状態に至る推移が起こった」という表現形式を取っている (「… た」と言う語尾がそれを示している) からである．ところが，実際には，これらのイタリア語文に添えられた日本語文はその日本語訳として立派に通用すると思われるのである．

例えば，動詞 stancarsi「疲れる」を近過去 (1 人称単数形) mi sono stancato にすれば「(私は) 疲れた」の意味になるはずであるが，現在の状況に言及して「疲れた」と言う場合は，(完結アスペクトの意味で) mi sono stancato という形を使うことはあまりなく，普通はむしろ sono stanco と言うのである．

イタリア語文も日本語文でも，話者の伝えたい事の内容に (大きくは) 違いがないとすると，総体的に言えば，どちらも，主語の現在の状況とそれに至るまでの経緯を伝えるという点で同じはずである．とすれば，これらの用例も，日本語がある出来事を述べることによってその結果を示しているのに対して，イタリア語では，ある時点での状況を述べることによ

[17] (15) は特に特定の文献からの引用というわけではないが，どれも日常会話でよく使われる文である．

ってそれに至る経緯を示唆しているものと言えるであろう.

È arrivato が「着いた」の意味になるのに, mi sono stancato が必ずしも「疲れた」の意味で使えない (つまり動詞の活用上は並行した２つの形が, 意味の上では必ずしも並行した振る舞いを示さない) というこの問題は, 語彙とその慣用の問題とも深く関係すると思われ, どこまで体系化が可能か定かではない. 文法についての組織的な記述よりも, 辞書的な, 個々の単語の記述の問題として片付けられてしまうことが多いと思われる. つまり, とりあえず sono stanco に「(私は) 疲れた」という訳をあてがってそれで問題解決としてしまう (訳の日本語文がなぜそのような表現形式をしているのかを深く問わずに) ということである.

このような形でイタリア語の表現形式とそれに対応する日本語のそれとの間にずれが見出されるケースは, 意外と多く, 過小評価できないと思われる. アスペクトという体系に関わる問題が, 語彙という個々の言語の慣習と深く関わっているという意味で, アスペクト研究における困難なケースの１つを代表していると言えようか.

6. 結果と推移

結果を表わす完了アスペクトが, 「完結アスペクト」という名称も付けられて, アスペクトの理論の中にそれなりに安定した位置づけが既に与えられている (そして記述言語学のみならず学校文法においても必ずといって良いほど言及されている) のに対して, 「状況を言い表すことによってそれに先立つ経緯を示唆する」という表現形式については, 未だ文法・辞書などの記述においてまとまった言及がないのが普通である. そもそもそのような現象を示す決まった名称さえ, アスペクトの理論の中にもアクツィオンスアルトに関する理論の中にも, いまだ存在しないように見える — 少なくともイタリア語について刊行されたものに関しては. しかし, 前章で垣間見た通り, この問題は, アスペクトと他の現象との接点を持つ, 興味深いテーマとなる可能性があると思われる.[18]

[18] 前章では語彙の側面との関係を取り上げたが, １つの言語形式によって, その論理的帰結として推定しうる出来事を示唆する, という表現方法は, 言語のさまざまなレベルで起こり得る現象であろう. 例えば, 「ペンを持っていますか?」が「私はあなたにペンをお借りしたいのです」ということを表わすという現象は, さまざまな観点から論じられてきたのは周知の通りである. したがって, 「状況を言い表すことによってそれに先立つ経緯を示唆する」という表現形式は, 語用論や談話の文法, また, メトニミーやメタファーなどとも接点があるはずであるが, これについては別の機会に譲らなければならない.

参考文献

(1) 広文典・参照文典

BATTAGLIA, Giovanni 1985. *Nuova grammatica italiana per stranieri*, illustrazioni di Asun Balzola, 8. ed., Bonacci Editore, Roma.

DARDANO, Maurizio & TRIFONE, Pietro 1997. *La nuova grammatica della lingua italiana*, Zanichelli, Bologna.

LEPSCHY, Laura & LEPSCHY, Giulio 1995. *La lingua italiana : storia varietà dell'uso grammatica*, nuova ed., Bompiani, Milano

PATOTA, Giuseppe 2006. *Grammatica di riferimento dell'italiano contemporaneo*, Garzanti, Milano.

RENZI, Lorenzo 1991. a cura di, *Grande grammatica italiana di consultazione* ; vol. 1, *La Frase; I Sintagmi nominale e preposizionale*, Il Mulino, Bologna.

RENZI, Lorenzo & SALVI, Giampaolo 1991. a cura di ; [redazione a cura di Anna Cardinaletti] *Grande grammatica italiana di consultazione*; vol. 2 *I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, Il Mulino, Bologna.

RENZI, Lorenzo, SALVI , Giampaolo, CARDINALETTI , Anna 2001. a cura di, *Grande grammatica italiana di consultazione* vol. 3, *Tipi di frase, deissi, formazione delle parole*, nuova ed., Il Mulino Bologna.

REGULA , M. & JERNEJ, J. 1975. *Grammatica italiana descrittiva : su basi storiche e psicologiche*, 2. ed. riveduta e ampliata, Francke, Bern ; München.

SALVI, Giampaolo & VANELLI, Laura 1992. *Grammatica essenziale di riferimento della lingua italiana*, Istituto geografico De Agostini, Novara : Le Monnier , Firenze.

SALVI, Giampaolo & VANELLI , Laura 2004. *Nuova grammatica italiana*, Il mulino.

SENSINI, Marcello 1999. *La grammatica della lingua italiana. Guida alla conoscenza e all'uso dell'italiano scritto e parlato*. Mondadori, Milano.

SERIANNI, Luca 1988. *Grammatica italiana : italiano comune e lingua letteraria, suoni, forme, costrutti*, con la collaborazione di Alberto Castelvecchi, UTET, Torino.

小林惺著. 1975.『イタリア語小文法』白水社, 東京.

坂本鉄男. 1979.『現代イタリア文法』白水社, 東京.

(2) 辞書

De Mauro. Il dizionario della lingua italiana., Paravia; Bruno Mondadori editore, Milano, 2000.

Devoto-Oli. Il dizionario della lingua italiana di Giacomo Devoto e Gian Carlo Oli, casa editrice Felice.

Le Monnier S.p.A., Firenze, nuova edizione aprile 1995, prima ristampa luglio 1995

DISC. Dizionario italiano Sabatino Coletti, Giunti Gruppo Editoriale, Firenze, prima edizione, 1997.

Garzanti. Dizionario italiano. Con sinonimi e contrari e inserti di nomenclatura., Garzanti, Milano, edizione aggiornata 2002.

Lo Zingarelli. Vocabolario della lingua italiana di Nicola Zingarelli, a cura di Miro Dogliotto e Luigi Rosiello, Zanichelli, Bologna, dodicesima edizione, decima consecutive ristampa annuale, 2003.